

推奨される抗核抗体検査

間接蛍光抗体法を用いた抗核抗体検査は、HEp-2細胞という培養細胞を核材に用いるという現在の方法になって30年以上経過しています。暗室内で、何倍まで光っているか、どのような型かなど、修練された方は多いと思います。昨今、免疫血清検査は、多くが自動化され、この抗核抗体検査にも、細胞に代わる核抗原の使用、自動判定などの波が押し寄せてきています。しかし、いまだほとんどの施設が従来の方法を自己免疫疾患のスクリーニングとして重用しているのは、この検査法に捨て難い意義があるからだと思います。今回の特集では、この伝統的検査の臨床面、技術面を再度俯瞰していただきます。臨床検査技師の腕の見せ所になるべき検査ですが、委託検査になりやすい現実も踏まえ、その視点での紹介も取り入れました。また、本検査の推奨をテーマにした海外の総説についても取り上げていますので、国際的な知見も視野に入れながら、現時点での理解を整理していただけたらと思います。

山田俊幸(自治医科大学臨床検査医学)